

論理／論証教育の思想（3）

－ テクストの観点から見た、論理／論証－

キーワード：論理 言論の場 論証 コミュニケーション 結束性

広島大学 難波博孝

0. はじめに

難波博孝（2009）（2010）では、以下のようなことを指摘してきた。

- ・「論理」は、文脈依存するものであること
- ・「論理」と「論証」を以下のように区別する必要があること

「論理」・・・ある項目（文／語／情報など）とある項目との因果関係

「論証」・・・ある「領域」（Toulmin1958によれば“field”）において妥当性を追究する過程

- ・国語科で以下を扱うべきであること
 - 「論理」（＝因果）を推論する力をつけること（＝「論理的思考力」）・・・初等段階
 - 「論証」における「field-dependent」な部分を推論すること（＝「論証的思考力」）
 - ・・・中等段階
 - 「論理」や「論証」をできるだけゆれのない言語で表現する（書く／話す）こと
- ・接続語がない文章部分で、接続語自体を考えさせることが、論理の教育になること
- ・論証をトゥルミンモデルとすると、その妥当性の裏づけは、学問体系でのみ行われること
- ・国語科教科書の、筆者の主張が書かれた文章（議論文と呼んでおく）がもし論証の文章なら、国語科内部だけで授業することには無理があること
- ・論証の文章ではない、国語科教科書の議論文（本発表では感化文と呼ぶことにする）は、その妥当性をどのように担保するのか、今までの国語科教育は不問に付してきていること
- ・その議論文が、論証の文章か感化の文章かは、文章自体の分析から考えるのには限界があること。なぜなら、文章は、言論の場という「文脈」で生まれたものだからである。

本論では、ここでいう「論理」以外に、広く「論理」と呼ばれている概念を、テキストの観点から定位し、その教育について展望するものである。

1. 文章も談話もテキストとして捉える

本論では、文字言語である文章も音声言語である談話も、いずれもテキストとして捉えている。テキストとして捉える、とはどういうことだろうか。テキストは織物、という意味である。つまり、テキストを、なにかとなにかの織物、と捉えるということである。

では、文章や談話は、なにとなにの織物なのだろうか。そのことを考えるために、押さえておきたいのは、文章も談話もコミュニケーションメディアである、ということである。文章や談話によって、だれかがだれかにコミュニケーションしようとした（あるいは、結果的にだれかとだれかがコミュニケーションした）ということである。

ここに出てくるコミュニケーションとは、伝達だけを含むわけではない。難波（2008）にあるように、コミュニケーションにはヤコブソンが指摘するような、少なくとも六つの機能（伝達／働きかけ／交話／感情表出／メタ化／詩的）をもっている。その全てを指して、コミュニケーションと呼んでいる。

文章や談話がコミュニケーションメディアであるなら、そこには送り手的な存在と受け手的な存在がいる（明確に分けられないこともあるが一応このようにしておく）。また、コミュニケーションであるから、それが起こる状況や、それまでの文脈に依存しているはずである。細かい議論は置いておいて、少なくとも文章や談話がコミュニケーションメディアであるなら、少なくとも、送り手と受けて、文脈と状況が関与していることは間違いない。そしてもちろん言語も。

ということは、文章や談話がコミュニケーションメディアであるなら、それらは、送り手／受け手／文脈／状況／言語の織物、つまりテキストということになる。だから、文章や談話の意味も、送り手／受け手／文脈／状況／言語によって織りなされている、ということになる。

文章や談話がテキストであるということは、文章や談話の意味は、言語だけで決められず、送り手／受け手／文脈／状況／言語という変数が組み合わされるこ

とによって決まる、多角的で変動的なものである、ということなのである。

多角的で変動的なら文章や談話の意味をとらえることは難しく、結果として人と人とがコミュニケーションするのがきわめて困難になる。そうならないようにするために、文章や談話では、それぞれの要素にいくつかのパターンが用意されており、デフォルトでの意味決定が容易になるようになっている。

その最もわかりやすいのが、言語である。たとえば、「だから」があれば順接でつながるとするのは、一つの型であり、デフォルトの意味である。ただし、テキストレベルの意味では、「だから」があっても順接とは限らない。送り手/受け手/文脈/状況によって、言語レベルでは順接でも、(1)のように、皮肉な逆接となることもあるからである。

(1) (蹴落としたいライバルに対して、楽屋にて。Aは歌で失敗している。)

「Aさんは、歌の先生についてすごく練習したんですね。だから、歌唱力があるんだわ」

また、話し手/聞き手/状況 がセットされていることもある。例えば、企業が開く就職説明会という状況を考えてみよう。そこでは、話し手(企業の人事担当者)も聞き手(就職希望者)もセッティングされている。この状況で語られる言語の背後にある、テキストの意味は、このセッティングされた状況によって大きく影響を受けるのである。

これは文字言語でも同様である。わたしたちが文章を読むとき、その文章の意味(テキストとしての意味)は、そこに書かれた言語を基にしながらも、誰が誰に向けてどんな媒体(雑誌、書物、書類・・・)を使ったか、今までどのような文章がその媒体ではあったか、などに影響されるだろう。このことは、教科書の教材も同じである、ということをもまずは指摘しておきたい(このことは後で触れる)。

2. テキストの中の論理/論証

論理は通常日常言語で語られる(記号や人工言語で表現される場合を除く)。つまり、論理は文章や談話の形で現れるのであるから、論理はテキストの中にある、といえる。とすると、論理も、送り手/受け手/文脈/状況/言語によって影響を受けるはずである。このことを指摘したのが、宇佐美(2008)のこの言葉である。「この本は語用論に基づく<論理>教育の改革の本である。(p.3)」語用論とは、言語のテキスト

レベルの使用について探究する学問である。それでは、テキストという観点からみたとき、論理や論証はどのように位置づくだろうか。

テキストレベルで文章や談話を考えるには、難波(2008)が示した観点を使うこととする。それは、二文間についてか、文章や談話全体についてか、という区別と、明示的か暗示的かという区別である。表で示すと以下ようになる。

	マイクロ構造(二文間)	マクロ構造(全体)
明示的	結束構造	(文章/談話)構成
暗示的	結束性	思考構造

もちろん、一語や一文でもテキストレベルでの分析は可能であるが(同じ語や同じ文でも、状況や文脈が変わればテキストレベルの意味が変わる)、ここでは二文以上の言語によって作られたテキストに焦点を絞りたい。

2. 1. ミクロ構造1- 結束構造について

結束構造とは、明示的な、言い換えると言語に現れた二文間のつながりを表すものである。結束構造は、日本の国語教育において最も注目されている構造である。接続語や指示語は、全てこの結束構造に含まれる。難波(2008)によれば、結束構造には以下のようなものが含まれている。

結束構造の種類		構造の性格
指示		あらわである
接続		
語彙的結束構造	反復	かくれている
	省略	
	関連語句の反復	
提題		あらわである
叙述		
略題		(文の主題が)かくれている
状況表現		(状況の範囲が)かくれている
語用論的結束構造		語用論的である

詳細は、難波(2008)を参照していただきたいが、

この表を見ると分かるように、結束構造でも、全てが言語化されているわけではない。たとえば、以下のようなものである。

私は、アイスクリームが好きだ。チョコレートも。
 (文の主題(私)の省略(=略題)と反復する述語の省略)
 昨日、私は電車に乗った。ドアに体を挟まれてしまった。
 (状況表現(二文目では省略)と語用論的結束構造(電車- ドア))

これらの例を見て分かるように、結束構造の中には言語化されていない部分もあるが、どれも、言語による復元が可能であり、文脈から容易に受け手が推論できる(推論することを送り手が期待している)ものであることがわかる。

ただし、この結束構造には、論理や論証そのものは入らない。論理や論証は、暗示的な関係だからである。ただ、論理や論証を推論するような手がかりは提供してくれる(例えば、「だから」「なぜなら」といった接続語が、因果関係を推論してくれるように)。

2. 2. ミクロ構造2- 結束性について

結束性は、二文の間に受け手が、状況や文脈に影響されながら作り出す関係である。文脈のや状況に合わせてなんらかのつながりをつくるから、読み手次第である一方で、完全に読み手の自由ではなく、状況や文脈、あるいは言語によって制限されており、「(関連性理論のいう)関連性」のあるつながりをつくることを期待されている。

難波(2008)によれば、結束性には以下のようなものがある。

メッセージの内容どうし の関係	時間関係 因果関係 手段- 目的関係
メッセージと発信者との 関係	評価関係
メッセージと受容者の 関係	ことがら- 説明関係(背景の 説明や原因の説明)
ことがらどうし の関係	類比関係 一般- 特殊関係 例示- まとめ関係 対比関係

この表のうち、因果関係 というものが、本論でい

う論理にあたる。したがって、論理は、結束性の一部である。また、ここでは、二文間に限定して結束性を示しているが、結束性は、段落と段落の間や、一文と他の複数の文との間にも生み出される可能性がある。例えば、「とんぼのひみつ」という題の文章において、

とんぼは古くから地球に住んでいます。とんぼはその飛び方に大きな特徴があります。

このように、とんぼにはまだ知られていないひみつがあるのです。

という部分において、一文目と二文目は類比(並列)の関係だが、一段落(一文目+二文目)と二段落との関係は、「例示- まとめ」関係になっている(という可能性が高い)ということである。

国語教育の立場からは、結束性について二つのことを指摘しておきたい。一つは、結束性は、接続語や指示語、つまり結束構造が一切なくても、状況や文脈があれば成立する、というものである。「私は納豆は嫌いだ。なっとうはねばねばしている。」という二文があった時、状況や文脈などがあれば、この二文間に因果関係という結束性を受け手が作り出すことがある、ということである。接続語や指示語ばかりにこだわっていると、結束性をつかまえることができなくなってしまうのである。(ここには送り手の、結束性への期待をどれだけ受け手が捕まえられるか、という大きな問題が潜んでいる)。

二つ目は、ここに出てきた結束性の多くの部分が、2011年度から実施された小学校学習指導要領に反映しているということである。例えば、順序関係は低学年の読むことの指導事項に明記されている。また、中学年で行う指導事項に「段落相互の関係」とあるが、中学年の説明文教材に多用されている段落の関係は、例示- まとめ関係 や 一般- 特殊関係 である(最後の段落で「このように」とまとめられているもの)。さらに、事実と意見との関係について、中高学年の指導事項に言及があるが、これは、因果関係のことを指している。このように、小学校学習指導要領には、結束性についてのまなざしがあるのである。

ただし、学習指導要領には、結束構造と結束性の区別がない。したがって、表層的なものと深層的な区別がついていないのである。国語教育に置いて重要なのは、たとえば、「このように」というまとめの接続語がなくても、その文が、前の文の「まとめ」になって

いることを解釈する力である。

2. 3. マクロ構造について

マイクロ構造が、文間（段落間）に生成する関係性というボトムアップ的なものである一方で、マクロ構造は、このような文章や談話はこのような構造になっているはずだ、というトップダウン的な構造である。いかえれば、ある種の発話や文章作成においては、その種特有の構成パターンがあるのであり、その構成パターンのことを、マクロ構造と呼ぶ、ということである。したがって、マクロ構造は、文章（談話）スキーマという言葉にもっともよくあてはまるといえる。

しかし、ここで注目すべきことは、マクロ構造にも、明示的なものと暗示的なものがある、ということである。ここでは、明示的なマクロ構造を、文章／談話構成、暗示的なマクロ構造を、思考構造と呼ぶことにする。例を含めてあげると以下ようになる。

構造の特性	名称	構造の具体例（非文学的文章の例）
明示的な構造	文章／談話構成	頭括型／尾括型／双括型など
暗示的な構造	思考構造	（下記以外に多くあり得る） 一般- 特殊型 前提- 譲歩- 持論型 問題解決型 現実的な問題解決型 科学的な問題解決型

なお、マクロ構造については、文章／談話構成も思考構造も、私自身も研究の途上である。また、文学的な文章の場合については、ロシアフォーリズムのファーブラとシュジェー、あるいはクリステヴァのジェノテキストとフェノテキスト などと関連させて考えられそうだが、まだ解明には至っていない。

しかし、難波博孝（2009）（2010）で述べてきた論証とは、この表における、科学的な問題解決型であることは明確に指摘できる。トゥルミンが示したモデルは、科学的な問題解決のための思考構造のモデルとして位置づけることができるだろう。もちろん、それを論文にしたり、発表したりするときは、そのモデルをそのまま言語化するのではなく、状況や受け手などを考えて、文章／談話構成を行うのである。

2. 4. まとめ

以上のように、テクストレベルの分析視点と論理、論証とを対応させて考えてみた。論理は、結束性、つまりマイクロ構造の暗示的な構造、の一部であり、論証は、思考構造、つまりマクロ構造の暗示的な構造の一部であった。いずれも、暗示的な構造であるため、文脈や状況などに影響されてしまうのである。だからこそ、論理や論証を、科学的な場面で表現する場合は、ゆれがないように言語をコントロールしなくてはならないのである。

3. おわりに

マクロ構造は、文章や談話のジャンルによって、大きく影響を受ける。物語か記録文か意見文かなどのジャンルは、明示的な構造も暗示的な構造も大きく左右する要因となる。

今回の学習指導要領では、書くこと領域だけではなく、他の領域でも、このジャンルについての注目がされている。このことをふまえ、今後の展望について以下のような示唆をしておきたい。

- ・ジャンルに合わせた、読むこと書くこと話すこと聞くこと教育を考える
- ・ジャンルと論証との関連を明確にして、それに合わせた教育プログラムを考える
- ・広義の論理を結束性と置き換え、結束性全てを育てるのを「思考の教育」、その一部である「論理」を育てるのを「論理の教育」として、区別しつつ両面をやっていくべきである。その上に「論証の教育」がある。
- ・日本の国語教育業界が「書いていないこと」について、理解と関心と知識を持つ。

（参考文献）

- 難波博孝（2008）『母語教育という思想』世界思想社
 難波博孝（2009）「母語教育の教育内容の妥当性の担保について一特に説明文／評論文教材について一」『国語教育研究』50 広島大学国語教育会
 難波博孝（2009a）「母語教育の教育内容の妥当性の担保について一特に説明文／評論文教材について一」『国語教育研究』50 広島大学国語教育会
 難波博孝（2009b）「論理／論証教育の思想（1）—「論理」と「論証」の定義および国語科との関連—」『国語教育思想研究』第一号
 難波博孝（2010）「論理／論証教育の思想（2）— 論理の教育および論証の妥当性について—」『国語教育思想研究』第二号